
死んだも同然

豊富銭平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだも同然

【Nコード】

N9311M

【作者名】

豊富銭平

【あらすじ】

俺は死ぬんだと実感した瞬間、どんなことをしても生きたいと思っ
った。

そして、俺はその手を掴んだ……。

(前書き)

前作から1年以上も間が空いてしまいました。
とにかく何か書かなくては、とやっつけで仕上げた作品です。
酷評お待ちしております。

死にたくない。

こんなにも生きたいと思ったのは初めてだ。

もし助かるのであれば何にでもすがるつもりで、そこに何もないと分かっていたけれど、生を逃がすまいと必死に手を伸ばした。

こんなところで死んでたまるか。死に物狂いとは、まさにこのことだ。

すると、何かに触れた。

人の手だった。それはとても冷たく、生にすがりつく俺を導く救いの手というよりかは、さっさと諦めてこちらへ来いと地獄へと促すような、死人の手のようだ。

そして 衝撃。

正体のわからない手をつかむことができたのはほんの一瞬で、すぐに引き離されることになった。

足掻いても無駄だ、と言われた気がした。俺はもう死から逃れることはできないのか。

全身の血管が熱くなっていくのがわかる。と思ったら、今度は一気に冷たくなった。死んだ経験なんてあるわけないのだが、俺の平凡なりに幾度か平凡な危険に遭った経験と直感が、死ぬのだと告げた。

生きることが諦めたその瞬間、頭の中に奇妙な声が聞こえた。

「死にたくは、ないでしょう……？」

ここはどこだ？

目を開いて間もなく、ぼんやりとしたままの視界が捉えたのは、真っ白い天井だった。

天井というのは勘で言ったにすぎない。ただ、よっぽど寝相が悪

くないかぎり、目が覚めてはじめに見るものは天井だ、という常識からそう思ったただけだ。

まあ、天国でもなければ、こつ真つ白な景色を拝むことはないだろう。

なにもかもが清潔さを表す白色、ドラマで見たことのある機材、病院だという根拠は山ほどある。

ここにいるということは、俺はけっこうな怪我をしたのだろう。一体どんな……？

記憶の扉をこじ開けようとすると、ひどい頭痛が襲ってきた。しかし、もうちよつとで思い出せそうなのだ。この程度の痛みに負けてたまるか。

そのとき、白衣をまとった初老の男性がいきなり入ってきた。

「まさか……！」

医者を象徴するかのような医者のような男は、小さくそう呟いた。おそらく医者なのだろう。

俺が起きていることが、そんなに驚くべきことらしい。それなら、ノックもしないで入室したことも仕方あるまい。

「これは奇跡ですよ」

彼はそう言った。奇跡という言葉は嫌いだ。まるで、死んでもともただったかのように聞こえるではないか。

「俺はいつたいどうなったんです？ 頭がぼーっとして、よく覚えていないんです」

とりあえずの説明と、後遺症があるかもしれないということを作り気にアピールする。

「覚えていないのも無理はありません。よっぽどひどく頭を打ったようでしたからね。あなたは赤信号だというのに車道を横断しようとしてトラックにはねられ、こんどはワゴン車に激突したのですよ」
「そうなんですか。ところで、手術をしてくださったのはあなたですか？ お礼が言いたい」

すると、医師はとんでもないと言わんばかりに手を振ってそれを

否定した。

「いえ、たしかに手術を担当したのは私ですが、正直なところ、私の腕ではあなたを助けることはできなかったでしょう。あなたの驚異的な回復力には、ただただ驚くばかりです」

彼はそう言ってくれたが、俺は内心気味が悪かった。

素直に喜ぶべきところなのかもしれないが、何かが心の奥でひっかかっている。そもそも、俺は昔から体が丈夫なほうではなかった。それが車に撥ねられて、医師がお手上げなほどの重症を、自然治癒だなんて。

「そういえば、起きてからずっと頭が重いんです。調べてもらえませんか？」

「ええ、もちろんです。すぐに退院というわけにはいきませんから、どこが悪いところがないか時間をかけてゆっくり検査していきましょう。とりあえず今日のところは、体を休ませることですね」

それだけ言うと医者は部屋から出て行った。

ほっと安心すると同時に、また眠気が襲ってきた。眠いというより、意識を保てないといったほうが正確に聞こえるほどの、すごいやつだ。

そして俺は、意識を手放した。

ふたたび目覚めたとき、俺は自分の体がまったく自由にならないように感じた。

上体を起こすことはもちろん、指一本すら動かすことができない。どうした？俺は死んだのか？

パニックになりそうなのを必死に抑えて、頭の中を整理しようとしたが、周りがうるさくて集中できない。大勢の人間が騒いでいる。しかし、それはパーティーのように華やかなものではなく、混乱のようなものだ。

電子音も聞こえる。どこかで聞いたような音だった。そう、ドラマや映画で登場人物が死んだときの、心電図のあれだ。

決して気持ちのいい音ではない。今この瞬間、誰かが死んだのだ。俺は重い瞼をなんとかこじ開けて、自分がどのような状況に置かれているのか確認しようとした。

そして、理解した。
死んだのは俺だ。

目が覚めた。

ここは天国か？ ああ、きっとそうにちがいない。俺は死んだのだから。

今度は記憶がはっきりしている。もし生きていたなら、もし脳が正常に機能しているなら、こつもすぐに思い出すことはできなかつただろう。これが死んでいるという証だ。

不思議と悔しいという思いはない。そういえば、一回事故で死んでいたかもしれない命なのだ。死というものを近くに感じて逝けただけでも、不意にこうなるよりかはいくらかよかったのかもしれない。

しかし、それにしても暗い。

死んでいるのだから当たり前かもしれないが、天国といえは暗黒の世界ではなく眩しいくらい純白の世界を想像していたのだが。それとも、ここは地獄なのだろうか。信号無視の罪だけで地獄に落とされたのなら、たまつたもんじゃない。

それに、身動きもとれない。

死んだのなら魂は肉体から解放され、自由になるのではないか。まるで死んだ肉体に閉じこめられているみたいだ。

そのとき、奇妙な声が聞こえた。

「ご明察のとおりです」

どこかで聞いたことのある声だ。地面の底から湧き出てくるような、どうも形容しにくいが、とにかく不愉快な気分させられる。

「なんだ？」

“誰だ？”とは聞けなかった。わからないことが多すぎて、声の主の正体だけを突き止めるだけでは納得いかないと思っっていたからかもしれない。

「おや、記憶を失っておられるのですか。これは厄介です」

「何がどうなっているんだ？ 知っていることがあつたら、教えてくれないか」

すると、相手はくすくすと笑い出した。こっちは真剣になつて下手にまで出て頼んでいるのに、本当に不愉快なやつだ。

「簡単ですよ。わたしは悪魔で、あなたとは絶対に破ることのできない契約で結ばれているのです」

もう驚くとか呆れるとか、そういう色んな感情がめちやくちやくにこんがらがつて、どうでもよくなつてきた。

「どんな契約だ？」

「あなたを絶対に死なせないという契約です。そして万が一、心の底から命を捨てたくなつたときに、わたしはあなたの魂を受け取ることになっています」

「何をいつてる？ 俺はもう死んでしまつたじゃないか！ それに、そんな契約を交わした覚えはないぞ！」

「トラックとぶつかる寸前、あなたはどんなことをしても生きたいと願つたではありませんか。そして、わたしの手をとつた。記憶がないのなら覚えていないのも仕方が無いでしょうが……、派手な事故でしたからねえ」

そう言つてまったくくすくすと笑いやがる。

「それはわかつた。しかし、俺が死んでいることはどうなんだ？」
すると、悪魔のやろうはこう答えやがつた。

「いえ、あなたは肉体が滅びただけで、魂はまだ死んではいません。肉体の消滅と同時に、どこにでも自由に行けるようになりますよ。何十年後のことになるかはわかりませんが、肉体が魂のどちらかでも存在している以上、我々は生きていますと認識します」

「ぶざけるな！」ついに怒りが爆発した。もう限界だ。

「俺は死んだんだ！ 魂だけ残ってるのは、幽霊のことじゃないか。俺はすぐ楽になりたい。さあ、魂でもなんでも持ってっくれ！」

悪魔は人差し指 指が5本あるのかは自信はないが を横に振った。

「いえ、あなたはまだ心のどこかで生きていたいと思っています。それでは魂は受け取れません。あなたがなんと言おうと、それを判断するのはわたしですから」

俺が反論しようとする寸前、なんとと言われるかわかっているかのように悪魔はつづける。

「あなた方、人間が滅びようと勝手ですが、我々には人間の魂が必要なのです。そして、我々が滅びることはありえませんが、あなた方はいずれ近い将来に滅びることになる。そのときのために、保存食が必要なのです。あなたにはもう千年ばかり、生きてもらいますよ。ちなみに、自分だけを哀れまないことです。あなたのような存在は、まだごまんといますから」

俺はもう何も言い返さなかった。すべてを諦めたのだ。

悪魔に人間が敵うわけがない。あいつらにとって俺たちは、働き蟻ぐらいの価値しかないのだ。さしずめ、あいつらは女王蟻といったところか。

もしかすると、あの事故も仕組まれていたのかもしれないな。そう、結局のところ、みんな必死に生きようとしているのだ。どんなことをしても。

くそ、それにしてもこれじゃあ、死んだも同然じゃないか。

(後書き)

よろしければ評価・感想お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9311m/>

死んだも同然

2010年10月8日13時46分発行